

## 心理社会的ストレス研究におけるストレス反応の測定\*

岡 安 孝 弘\*    片 柳 弘 司\*    鳴 田 洋 徳\*\*  
久 保 義 郎\*\*    坂 野 雄 二\*

### Measurements of Stress Responses in Psychosocial Stress Research\*

Takahiro Okayasu\*, Koji Katayanagi\*, Hironori Shimada\*\*,  
Yoshio Kubo\*\* and Yuji Sakano\*

#### Abstract

The psychosocial stress research exploring the factors which influence mental health has rapidly developed. There are two types of studies in this research field. The first type is a study which focuses on the relationship between important events that everyone experiences in his/her life and his/her health, the second type is the one which focuses on stress process; cognitive appraisal, coping, and the factors that related to them.

In this article, we tried to reveal how stress responses have been measured in past decade, referring psychosocial stress research appeared in APA journals. The stress response scales are roughly divided into two types according to the way of measuring psychological strain. One is the unidimensional scale which measures a specific aspect of stress responses, and the other is the general scale which measures multidimensional stress responses. As a result of analysis, the general scales tended to be often used rather than the unidimensional scales. That is, researchers tended to interpret stress responses multidimensional.

Finally, the problems on using stress response scales in psychosocial stress research and the availability of Item Response Theory for measuring stress responses were discussed.

#### 1. 心理社会的ストレス研究の最近の動向

現代の熾烈な競争社会の中において、「ストレス」という言葉が日常語として完全に定着してから既にかなりの年月が経つ。現代社会の一員として組み込まれている限り、ストレスから逃れる術がないことは誰もが感じていることである。このような背景の中で、ストレス研究の専門家ばかりでは

なくストレスに苦しんでいる一般の人々の大きな関心は、ストレスの原因となる出来事を排除することよりも、むしろストレスが心身の健康に及ぼす悪影響を最小限にとどめるにはどうすればよいか、という方向に向けられている。そのためには、ストレッサーにさらされた人が、ストレス反応を表出するまでのメカニズムを明らかにする必要がある。

---

\* 人間健康科学科  
\*\* 人間科学研究科

\* Department of Human Health Sciences  
\*\* Graduate School of Human Sciences

これまでの心理社会的ストレス研究における大きな流れのひとつは、人々が人生において経験する様々な出来事のストレス価を査定することにあった。その先駆となったのは、「社会的再適応評定尺度 (Social Readjustment Rating Scale)」を作成し、個人のストレス量を査定することを試みた Holmes & Rahe (1967) の研究である。彼らは、生活上の変化をもたらすような何らかの出来事を経験した場合、社会的に再適応する際に必要とされる労力をその出来事のストレス量として数値化し、その数値の合計が高いほど、将来病気に罹患する可能性が高いことを指摘した。この研究はその後の心理社会的ストレス研究に大きな刺激を与え、現在では生活ストレス (life event stress) 研究というひとつの領域として確立されている (Fisher & Reason, 1988)。

しかしながら、このようなアプローチは、ストレス反応や疾患の予測という点では、現在のところ必ずしも成功しているとは言えない。たとえば、「結婚」や「仕事上の成功」などの望ましい出来事は心身の健康とは無関係であること (Ross & Mirowski, 1979; Vinokur & Selzer, 1975) や、出来事に対する重みづけ得点を、価値観や信念の異なる人に対しても一律に適用することの問題 (Chiriboga, 1977) が指摘されている。より妥当性の高い生活ストレス尺度を作成するために、項目の選定法や重みづけ得点の算出法について多くの論議がなされている (Dohrenwend & Dohrenwend, 1974) が、最近では、出来事に対する評価の個人差を重視し、経験した出来事だけではなく、それに対する主観的評価も考慮に入れた尺度の開発が試みられている (たとえば、久田・丹羽, 1987; Newcomb, et al., 1981; Sarason, et al., 1978)。

このような生活ストレス研究に対して、Lazarus & Folkman (1984) は、経験した出来事に対する認知的評価やコーピングという個人の認知・行動的過程に焦点を当てたストレス理論を提唱した。この理論では、出来事に対する普遍的なストレス価の査定ではなく、出来事のもつきわめて個人的な意味合いが重視される。たとえば、「離婚」という出来事を経験したとしても、それを脅威的であ

ると評価するかどうか、またはどのようにコーピングするかどうかは、個人の価値観や信念、あるいは個人を取り巻く社会的・環境的背景に依存すると考えることができる。すなわち、出来事に対する認知的評価からコーピング方略に至る一連の過程、およびその過程に影響を及ぼす個人的・環境的変数を明らかにすることが、心身の健康の適切な予測につながると考えている。このような観点からのアプローチは、前述のような生活ストレス研究における問題点を解決するためのひとつの方向を示唆するものであると思われる。実際に最近の心理社会的ストレス研究では、生活ストレスと健康との直接的な関連性よりも、ストレス過程に影響を及ぼす要因やストレスラーのインパクトを緩衝する要因を究明することに、大きな関心が向けられている。

## 2. 心理社会的ストレス研究におけるストレス反応の測定

上記の2つのアプローチは、ストレスの捉え方に相違はあるものの、いずれも、心理社会的ストレスと心身の不健康状態 (ストレス反応) との因果関係を解明することを大きな目標としているという点では変わりはない。これまでの心理社会的ストレス研究においては、ストレスラーやストレス過程に介在する変数を明らかにし、それをどのように測定するかということに大きな比重が置かれてきた (Cooper & Payne, 1991)。しかしながら、そのような諸変数の効果を検証するための基準としているストレス反応の測定に関しては、それに匹敵する努力が払われてきたとは言い難い。

Lazarus & Folkman (1984) が指摘しているように、一口にストレス反応といっても、短期的な情動的变化、あるいは長期に渡って持続する身体的疾患、モラルや社会的機能の低下など多種多様である。現実には、様々な種類のストレス性疾患が報告されている (河野・吾郷, 1990; 佐藤・朝長, 1991) ことを考えると、ストレスラーの評価における個人差と同様に、ストレス反応の表出にも大きな個人差があることを否定できない。したがって、ストレス過程に関与する特定の独立変数や媒介変数の効果を論議する際に、基準となるス

ストレス反応の種類が異なっていたとすれば、その効果を正しく把握することが困難となるばかりか、結論において大きな矛盾を生じる原因ともなりかねない。

そこで本項では、心理社会的ストレス研究が心身の健康の多面性をどのように捉えてきたかを探る手掛かりのひとつを提供するために、過去10年間にストレス反応の測定に使用された尺度を概観し、どのようなストレス反応が心身の健康状態の指標として重視されてきたかを明らかにしたい。

#### 1) ストレス反応の測定に使用された尺度の推移

心理社会的ストレス研究が掲載されることの多い海外の主要雑誌(注1)を、1982~1991年の10年間にわたって検索したところ(注2)、683件の論文が抽出された。そのうち、心理社会的ストレスの研究領域に該当し、しかも従属変数としてストレス反応を測定している研究論文は266件であり、それを最終的な調査対象とした。

一般にストレス状態にある人は、情動的、認知・行動的、身体的な変化を表出すると考えられている。既存のストレス反応尺度は、(a)特定のストレス反応(たとえば抑うつ)のみを測定する一次元的尺度と、(b)特定のストレス反応だけではなく、多様なストレス反応を包括的に調べることを目的とした総合的尺度に大別することができる(新名, 1991)。

Fig.1は、過去10年間において、調査対象論文総数(266論文)に対する、一次元的尺度および総合的尺度が使用されている論文数の占める割合の推移を示したものである。なお、両尺度を併用している研究論文もあるため、ここでは一次元的尺度のみ、総合的尺度のみ、両尺度の併用の3つのケースに分けて示した。

過去10年間では、一次元的尺度のみを使用した研究は漸減傾向にあるが、それに対して特に最近の5年間は、総合的尺度のみの使用あるいは両者を併用した研究が増加している。これは、身体的な反応も含めて多面的にストレス反応を測定する必要性の認識が、研究者の間に浸透してきたことの表われであると言えよう。

また、Fig.2は、過去10年間に一次元的ストレス反応尺度を使用した論文の合計数を、尺度ごとに示したものである。なお、総使用数が3未満の尺度を用いている論文は「その他」に算入されている。一次元的ストレス反応としては、抑うつと不安を指標とした研究が多く、抑うつ反応の測定にはBDIとCES-D、不安反応の測定にはSTAIの使用頻度が高い。

Fig.3は、総合的ストレス反応尺度を使用した論文数を示したものである。総合的ストレス反応尺度の多くは、情動的反応、認知・行動的反応、身体的反応のすべての側面を調べることを目的としており、中でもHSCLおよびその改訂版(注3)

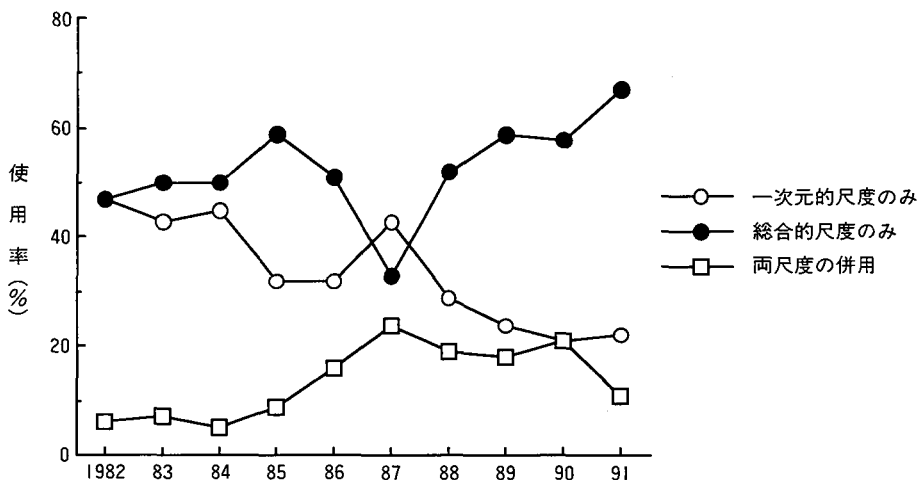


Fig. 1 過去10年間におけるストレス反応尺度の使用率の推移

の使用頻度が顕著に高いことがわかる。

2) ストレス反応尺度の概要

過去10年間の心理社会的ストレス研究において使用されたストレス反応の自己評定尺度のうち、使用頻度の高い尺度の概要を以下に紹介する。

a) 一次元的ストレス反応尺度

一次元的ストレス反応の指標としてよく用いられるのは、抑うつと不安である。特に抑うつ反応の測定については、臨床的使用を目的とした多くの尺度が開発されている。

① Beck Depression Inventory (BDI) (Beck, 1967; Beck & Beck, 1972)

抑うつ度の測定に最もよく用いられる尺度であり、標準版と短縮版がある。標準版は、悲哀感や絶望感、罪悪感などの否定的な認知・思考を測定する14項目と、疲労感や睡眠障害、食欲減退などの身体的症状を測定する7項目、合計21項目から成っている。各項目に対し4段階評定(0~3点)を求め、一般に合計得点が14点以上であれば中度の、21点以上であれば重度の抑うつ状態であると判断される(Steer, et al., 1986)。短縮版は、標準版と高い相関が維持されるように13項目が選ばれており、8点以上が中度の、16点以上が重度の抑うつ状態であるとされている(Beck & Beck, 1972)。い

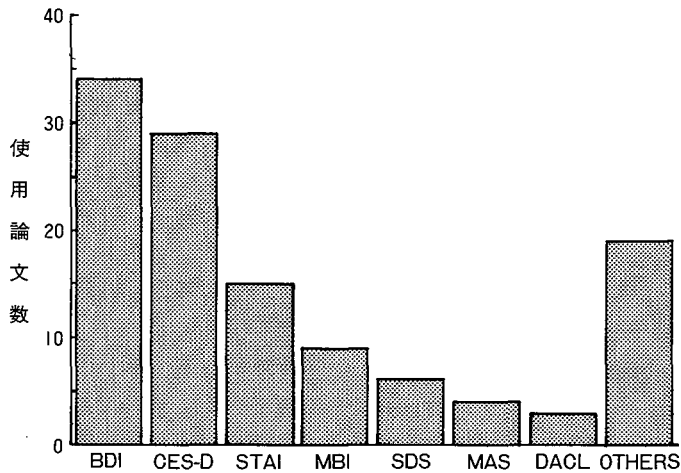


Fig. 2 過去10年間に使用された一次元的ストレス反応尺度の種類とその使用状況

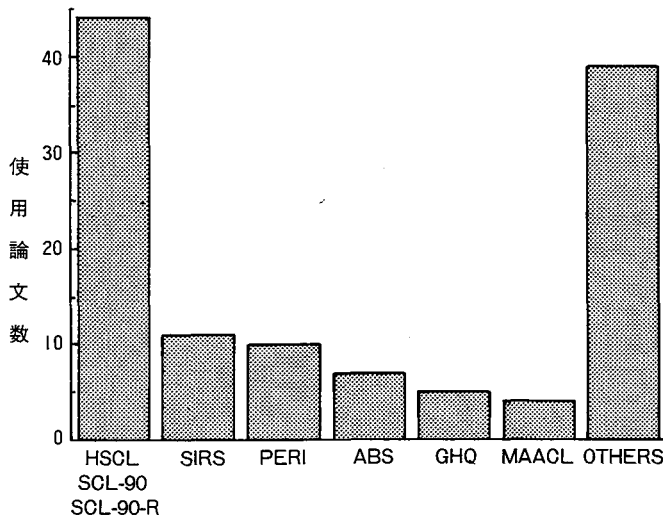


Fig. 3 過去10年間に使用された総合的ストレス反応尺度の種類とその使用状況

ずれも、臨床的診断との相関が高いことが知られており、うつ病のスクリーニングに用いられることが多い。

② Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) (Radloff, 1977)

抑うつ気分や絶望感、身体的反応に関する20項目に対し、4段階で評定を求めるものである。BDIやSDSのように臨床的診断やうつ病の治療過程での評価を目的とするものではなく、一般の健常者を対象とした疫学的調査を目的として開発された比較的新しい尺度である。なお、子どもを対象とした尺度 (the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale for Children (CES-DC) も開発されている (Faulstich, et al., 1986)。

③ The Self-rating Depression Scale (SDS) (Zung, 1965)

最近の気分や思考、身体的症状を尋ねる項目を中心とした20項目に対し、4段階で評定を求めるものである。臨床的診断との相関、およびBDIとの相関が高いことも知られている (Biggs, et al., 1978)。BDIと同様に、うつ病の研究やスクリーニングに用いられる頻度が高い。日本語版として標準化されており、日本の精神科領域においても最もよく用いられる抑うつ尺度のひとつである。

④ Depression Adjective Checklist (DACL) (Lubin, 1965)

慢性的な抑うつ状態ではなく、一時的な抑うつ感を測定する尺度である。尺度は7種類の形容詞リストから成っており、そのうち4つのリスト (Form-A, B, C, D) にはそれぞれ32の形容詞が、3つのリスト (Form-E, F, G) にはそれぞれ34の形容詞が記載されている。Form-A, B, C, Dは女性において、Form-E, F, Gは男性において信頼性が高いことが報告されているが、両性に対して同時に施行する場合は、Form-E, F, Gを使用することが薦められている (Lubin, et al., 1980)。また、比較的短時間で回答できるため、実験的研究における情動の主観的評定にも有効であると思われる。

抑うつ尺度ほど使用頻度は高くないが、不安もストレス反応の指標のひとつとして測定されることが多い。よく用いられる不安尺度は次の2つである。

⑤ State-Trait Anxiety Inventory (STAI) (Spielberger, et al., 1970)

Spielberger (1966, 1972) の状態-特性不安理論 (state-trait anxiety theory) に立脚して作成された尺度で、状態不安を測定する State-Form と特性不安を測定する Trait-Form の2つに分けられる。状態不安は脅威的狀況におかれた時に喚起される一過的な不安状態を、特性不安は比較的安定的な個人の特性としての不安傾向を指す。どちらのフォームも20項目から成る4段階評定の尺度であり、研究目的によって使い分けられる。State-Form は、横断的調査研究や実験的研究における不安状態の主観的評定に、Trait-Form は長期にわたる縦断的研究において不安傾向の変化を査定するために用いられることが多い。

⑥ Manifest Anxiety Scale (MAS) (Taylor, 1953)

MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory) から不安に関係する情動的・認知的・身体的反応項目を抽出したもので、個人の比較的安定的な不安傾向を測定するという点で、STAI Trait-Form と性格が似ている。本来、条件づけの成立に関与する個人差要因としての不安を測定することを目的として開発されたが、その後精神医学や心身医学の領域での不安測定に最もよく用いられるようになった。現在市販されているのは、65項目、3件法の尺度である。

また、最近の心理社会的ストレスの領域では、職場ストレス、特に医療や福祉、教育などのヒューマン・サービス業務の従事者と燃えつき症候群 (burnout) に関する研究が注目されている (久保・田尾, 1991)。燃えつき症候群とは、職場において過重で持続的なストレスにさらされた結果、極度の身体的疲労感、労働意欲や豊かな感情の喪失などのような、いわば“燃えつきた”状態に陥ることを指す (Maslach, 1976)。この状態の測定には、この概念を提唱した Maslach の尺度がよく用いられる。

⑦ Maslach Burnout Inventory (MBI) (Maslach & Jackson, 1981)

情緒的疲弊 (9項目)、自己達成感 (8項目)、離人化傾向 (5項目) を測定する22項目から成り、各

項目についてその経験の有無を尋ね、経験したことがある項目に対しては、その経験頻度を6段階で、およびその強度を7段階で評定を求める尺度である。MBIは、特に医療や福祉、教育など、直接人間に対峙する機会が多いヒューマン・サービス業務の従事者において、高得点を示す傾向にあることが知られている。

#### b) 総合的ストレス反応尺度

総合的ストレス反応尺度は、人間がストレス状態におかれた時に表出すると想定される反応を、多面的に測定することを目的とした尺度である。したがって、一次元的ストレス反応尺度に比べて、尺度に含まれる項目数はかなり多い。よく用いられるのは以下の尺度である。

⑧ Hopkins Symptom Checklist (HSCL) (Derogatis, et al., 1974) : Symptom Checklist-90 (Derogatis, et al., 1976) : Symptom Checklist-90-Revised (SCL-90-R) (Derogatis, 1977)

HSCLは、抑うつ反応、強迫症状、対人的敏感性、不安反応、身体的症状の5因子、58項目から成る4段階評定尺度である。この尺度に、敵意、恐怖、妄想観念、精神病的症状の4因子を加えて、全部で90項目、5段階評定尺度として改訂されたものがSCL-90である。現在では、それをさらに改訂したSCL-90-Rが最もよく用いられている。本来、精神神経科領域において、症状を評価する上で妥当性が高く、判定の容易な主観的評定尺度の要請によって開発された尺度のひとつであるが、心理社会的ストレス研究においても、ストレス反応を総合的に測定する尺度として使用頻度が最も高い。

⑨ the Seriousness of Illness Rating Scale (SIRS) (Wyler, et al., 1968)

身体的・精神的疾患や症状が記述された126項目から成り、各項目にはその疾患や症状の不快感や生活に及ぼす影響の程度に基づいて重みづけ得点が決められている。たとえば、消化器潰瘍には500点、心臓発作には855点が与えられている。項目数が多いため、心理社会的ストレス研究では、研究目的によっては、稀にしか起こらない疾患を含む項目は除外されることが多い。

⑩ Psychiatric Epidemiology Research Instru-

ment (PERI) (Dohrenwend, et al., 1980)

健常者を対象とした25項目から成る5段階評定尺度であるが、3段階評定尺度として用いられる場合もある。主に、不安や抑うつ、神経質傾向を測定するもので、項目数が少なく容易に実施できるため、最近の心理社会的ストレス研究で使用されることが多くなってきた。

⑪ General Health Questionnaire (GHQ) (Goldberg, 1978)

原版は140項目から成る4段階評定尺度で、全身的症状(17項目)、局所的な身体症状(18項目)、睡眠と覚醒(19項目)、日常的行動(22項目)、対人行動(20項目)、日常生活での不満やトラブル(25項目)、抑うつ・不安(19項目)の7つの下位尺度がある。なお、症状の簡単なスクリーニングのために、60, 30, 28, 12項目版といった短縮版が用意されており、心理社会的ストレス研究では、これらの短縮版が利用されることが多い。

⑫ Affect Balance Scale (ABS) (Bradburn, 1969)

ポジティブな感情とネガティブな感情を表わす項目が各5項目ずつ、計10項目から成り、各項目に対する最近の感情を「はい」「いいえ」の2件法で回答を求める尺度である。「はい」の回答がポジティブ項目に多く、ネガティブ項目に少ないほど、感情のバランスが良いと判断される。項目数が少ないため、多面的尺度としての妥当性には疑問が残されるが、短時間でストレス反応を測定する必要がある場合には有効である。

⑬ Multiple Affect Adjective Checklist (MAACL) (Zuckerman & Lubin, 1965)

形容詞によって情動状態を調べる尺度で、132の形容詞リストから成る。3種類の感情、抑うつ、不安、敵意に関する現在の状態を測定するために用いられる。

ここで紹介した13の尺度はストレス反応尺度のごく一部に過ぎないが、最近10年間の傾向をみる限り、かなり使用頻度の高い尺度であると言える。

### 3. 今後の展望

前章では、最近10年間の心理社会的ストレス研究で使用されてきたストレス反応尺度の動向を示

し、また尺度の概要について簡単に紹介したが、使用頻度の高い尺度は、精神医学や心身医学などの臨床領域において、主に患者のスクリーニングや治療効果を評価するために開発されたものが多い。すなわち、心理社会的ストレス研究では、ストレスラーの効果やストレス過程に関与する要因の効果を検討する上での基準となる従属変数を、臨床的研究の知見に依存してきたと言える。

ここで紹介した尺度は、いずれも妥当性についての検討は充分に行なわれている。しかしながら、新名(1991)が指摘しているように、その妥当性は臨床領域のサンプルを対象としたものであり、一般健常者に対する妥当性については疑問がある。実際にこのような尺度の一部には、健常者での出現頻度のごく低いと思われる反応項目が存在している。心理社会的ストレス研究において測定しようとしているストレス反応は、患者が示す重い症状ではなく、健常者が日常示す感情や思考、行動の変化や、疾病の兆候にあたる比較的軽い症状であることが多い。心理社会的ストレスラーの影響やストレス媒介過程の機能を明らかにするためには、健常者が示す微妙な反応を変化を捕捉できる多面的なストレス反応尺度の開発が必要とされよう。

そのひとつの試みとして、新名他(1990)は、一般健常者の自由記述から得られた心理的ストレス反応を収集し、最終的に53項目、4段階評定の心理的ストレス反応尺度(Psychological Stress Response Scale: PSRS)を開発した。PSRSは、情動的反応として4下位尺度、認知・行動的反応として9下位尺度をもち、それらを多面的に測定することを意図した尺度である。また、岡安他(1992)は、学校ストレスを検討するために、中学生用ストレス反応尺度を作成した。これは、PSRSの項目を参考にし、さらに身体的反応も含めた46項目から成り、中学生が示す傾向の高い、不機嫌・怒り反応、抑うつ・不安反応、無力感、身体的反応の4つの下位尺度で構成されている。どちらの尺度も、健常者を対象とした場合の反応出現率が10%未満の項目は除外されており、健常者が比較的示す傾向の高いストレス反応項目によって構成されている尺度であると言えよう。今後の心理社会的スト

レス研究では、このような観点からストレス反応を捉えて、心理社会的ストレスのメカニズムについて分析を加えることも重要であると思われる。

また、従来用いられてきた尺度のもうひとつの問題点は、尺度に含まれる項目数が非常に多いことである。最近の社会心理的ストレス研究では、ストレス反応の他にも、独立変数としてストレスラーや媒介変数に関する多くの尺度を同時に施行し、それらの間の関係について検討するという方法を採用している研究が多い。そのため、それに回答する被検者の負担が大きくなり、データに偏向が生じる原因ともなりかねない。

一次元的ストレス反応尺度であれば、項目数が比較的少なく、回答も容易であるが、ストレス反応のごく一部の側面しか測定することができない。ストレス反応の表出は人によって様々であり、たとえば同じストレスラーにさらされたとしても、ある人は怒りを感じるかもしれないし、ある人は抑うつ状態に陥るかもしれない。また、情動的变化は知覚されなくても、行動傾向や身体的に変化を生じる人もいるかもしれない。特に個人差要因を重視する研究では、ストレス反応を多面的に測定する必要がある。すなわち、多面的なストレス反応を測定しようとするれば被検者の負担が増えるし、被検者の負担を軽減しようとするれば限定されたストレス反応しか測定できない、という相反する問題がある。

従来の心理測定法の枠組の中では、この問題を解決することは困難であるが、最近提唱された項目反応理論(Item Response Theory: IRT)(Hambleton & Swaminathan, 1985; 芝, 1991)は、この問題の解決のためのひとつの糸口となる可能性をもつと思われる。これまで、心理測定におけるIRTは、学力などのような能力測定分野以外に適用されることは稀であったが、最近では態度測定分野にも応用が可能であることが示唆されている(渡辺, 1989, 1992a)。

伝統的なテスト理論では、複数の項目を含む尺度の得点によって、信頼性や妥当性に関する論議がなされてきたが、IRTでは、項目のセットではなくひとつひとつの項目のもつ意味や強度、すなわち項目の絶対的な位置を決めることができる。

したがって、ストレス反応の測定に応用する場合に、次のような利点がある。

第一に、ひとつの尺度を構成する項目群から、意味や強度が等価な項目を除外することによって、尺度に含まれる項目数を節約することができる。また、項目の絶対的位置を知ることができれば、項目を適宜組み合わせることによって、意味や強度の異なる尺度を複数作成できる。被検者の属性に合わせて適当な尺度を選択すれば、回答時間をかなり節約することができよう。さらに、絶対的位置が等価で表現の異なる項目群を複数用意することも可能であり、縦断的研究や実験的研究で繰り返し評定を求める場合に、全く同じ表現の項目を反復することから生じる回答の偏向を抑えることができよう。

第二に、研究領域を問わず、英語で表記された尺度を日本語に訳出して使用することが多いが、いくら慎重に訳出しても項目のもつ意味内容に相違が生じることがある。IRTはこのような場合にも有効で、もし英語表記の項目と日本語表記の項目に対する回答を得ることができれば、対応する項目の等価性を確認することが可能である。これは、特に国際比較研究において交差文化等価性 (cross-cultural equivalence) を確保する上で有効であろう (渡辺, 1992a, 1992b)。

IRTは、ストレス反応尺度だけではなく、他の様々な尺度に対しても適用が可能である。伝統的な心理測定法にはない特徴をもつ方法として、検討する価値は充分にある。しかしながら、IRTはまだ発展途上の段階にあり、態度測定にどの程度有効であるのかはまだ明確にされていない。また、パラメータの推定の際に、大量のデータを必要とすることや、尺度の潜在特性の一次元性を前提としなければならないなど難しい問題も多い (渡辺, 1989)。

人間が表出するストレス反応は多種多様であり、個人差も大きい。したがって、心理社会的ストレスのメカニズムについて包括的に検討するためには、多面的なストレス反応の測定が要求される。しかしながら、被検者の大きな負担にならないように、多面的にストレス反応を測定することは難しい。今後の研究では、伝統的な心理測定法だけ

ではなく、IRTのような新しい測定法も取り入れることによって、心理社会的ストレス研究領域独自の新しい尺度を開発する試みが必要とされよう。

(注1) 検索対象とした雑誌は下記の11誌である。  
 American Journal of Community Psychology  
 Health Psychology  
 Journal of Abnormal Psychology  
 Journal of Applied Social Psychology  
 Journal of Applied Psychology  
 Journal of Behavioral Medicine  
 Journal of Community Psychology  
 Journal of Consulting and Clinical Psychology  
 Journal of Health and Social Behavior  
 Journal of Human Stress  
 Journal of Personality and Social Psychology

(注2) American Psychological Associationのデータベースに、“Stress”のカテゴリーで登録されている論文のうち、前記の11雑誌に掲載されている全論文を検索対象とした。なお、“Stress”のカテゴリーは以下の下位カテゴリーに分類されている。

Environmental Stress  
 Occupational Stress  
 Physiological Stress  
 Psychological Stress  
 Social Stress  
 Stress Reactions

(注3) HSCLはSCL-90およびSCL-90-Rの前身にあたるもので、内容的には大きな相違がないため、ここではこれら3尺度の使用数の合計を示した。

\* 本論文は、人間科学研究科の有志の集まりである社会的不適応研究会での論議から生まれた成果のひとつである。会のメンバーである、福井知美、野中桜子、温泉美雪、坂根恭子、瀬尾亜希子、瀬戸正弘、戸ヶ崎泰子、矢嶋亜暁子、山野美樹の諸君、および資料の収集に御尽力を賜った早稲田大学所沢図書館の皆様、心より感謝申し上げます。



## 引用文献

- Beck, A.T. 1967 *Depression: Causes and treatment*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Beck, A.T., & Beck, R.W. 1972 Screening depressed patients in family practice: A rapid technic. *Postgraduate Medicine*, **52**, 81-85.
- Biggs, J.T., Wylie, L.T., & Ziegler, V. E. 1978 Validity of the Zung self-rating depression scale. *British Journal of Psychiatry*, **132**, 381-385.
- Bradburn, N. 1969 *The structure of psychological well-being*. Chicago: Aldine.
- Chiriboga, D.A. 1977 Life event weighting systems: A comparative analysis. *Journal of Psychosomatic Research*, **21**, 415-422.
- Cooper, C.L., & Payne, R. (Eds.) 1991 *Personality and stress: Individual differences in the stress process*. New York: John Wiley & Sons.
- Derogatis, L.R., Lipman, R.S., Rickels, K., Uhlenhuth, E.H., & Covi, L. 1974 The Hopkins Checklist (HSCL): A self-report symptom inventory. *Behavioral Science*, **19**, 1-15.
- Derogatis, L.R., Rickels, K., & Rock, A.F. 1976 The SCL-90 and the MMPI: A step in the validation of a new self-report scale. *British Journal of Psychiatry*, **128**, 280-289.
- Derogatis, L.R. 1977 *SCL-90: Administration, scoring, and procedures manual-I for the revised version*. Baltimore, MD: Author.
- Dohrenwend, B.S., & Dohrenwend, B.P. 1974 *Stressful life events: Their nature and effects*. New York: John Wiley & Sons.
- Dohrenwend, B.P., Shrout, P.E., Egri, G. Mendelson, F.S. 1980 Nonspecific psychological distress other dimensions of psychopathology. *Archives of General Psychiatry*, **37**, 1229-1236.
- Faulstich, M.E., Carey, M.P., Ruggiero, L., Enyart, P., & Gresham, F. 1986 Assessment of depression in childhood and adolescence: An evaluation of the center for epidemiological studies depression scale for children (CES-DC). *American Journal of Psychiatry*, **143**, 1024-1027.
- Fisher, S., & Reason, J. (Eds.) 1988 *Handbook of life stress, cognition and health*. New York: John Wiley and Sons.
- Goldberg, D. 1978 *Manual of the General Health Questionnaire*. Windsor, England: National Foundation for Educational Research.
- Hambleton, R.K., & Swaminathan, H. 1985 *Item response theory: Principles and applications*. Boston: Kluwer-Nijhoff.
- 久田 満・丹羽 郁夫 1987 大学生の生活ストレスサー測定に関する研究—大学生用生活 体験尺度の作成— 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, **27**, 45-55.
- Holmes, T.H., & Rahe, R.H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 213-218.
- 河野 友信・吾郷 晋浩 (編) 1990 ストレス診療ハンドブック メディカル・サイエンス・インターナショナル
- 久保 真人・田尾 雅夫 1991 バーンアウト—概念と症状, 因果関係について— 心理学評論, **34**, 3, 412-431.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and Coping*. New York: Springer.
- Lubin, B. 1965 Adjective checklists for measurement of depression. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 57-62.
- Lubin, B., Caplan, M. E., & Collins, J. F. 1980 Additional evidence for comparability of set two (lists E, F, and G) of the Depression Adjective Checklists. *Psychological Reports*, **46**, 849-850.
- Maslach, C. 1976 Burned-out. *Human Behavior*, **5**, 16-22.
- Maslach, C., & Jackson, S.E. 1981 The measurement of experienced burnout. *Journal of Occupational Behavior*, **2**, 99-113.
- Newcomb, M.D., Huba, G.J., & Bentler, P.M. 1981 A multidimensional assessment of stressful life events among adolescents: Derivation and correlates. *Journal of Health and Social Behavior*, **22**, 400-415.
- 新名 理恵 1991 心理的ストレス反応の測定 佐藤・朝長(編)ストレスの仕組みと積極的対応 藤田企画出版
- 新名 理恵・坂田 成輝・矢富 直美・本間 昭 1990 心理的ストレス反応尺度の開発 心身医学, **30**, 1, 29-38.
- 岡安 孝弘・嶋田 洋徳・坂野 雄二 1992 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究, **5**, 23-29.
- Radloff, L. S. 1977 The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-401.
- Ross, C.E., & Mirowski, J. 1979 A comparison of life-event-weighting schemes: Change, undesirability, and effect-proportional indices. *Journal of Health and Social Behavior*, **20**, 932-946.
- Sarason, I.G., Johnson, J.H., & Siegel, J.M. 1978 Assessing the impact of life changes: Development of the life experiences survey. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**,

- 932-946.
- 佐藤 昭夫・朝長 正徳(編) 1991 ストレスの仕組みと積極的対応 藤田企画出版
- 芝 祐順 1991 項目反応理論—基礎と応用— 東京大学出版会
- Spielberger, C.D. 1966 Theory and research on anxiety. In C.D. Spielberger (Ed.), *Anxiety and behavior*. New York: Academic Press.
- Spielberger, C.D. 1972 Anxiety as an emotional state. In C.D. Spielberger (Ed.), *Anxiety: Current trends in theory and research. Vol.1*. New York: Academic Press.
- Spielberger, C.D., Gorus, R. & Lushene, R. 1970 *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologist Press.
- Steer, R. A., Beck, A. T., & Garrison, B. 1986 Applications of the Beck Depression Inventory. In N. Sartorius & T. A. Ban(Eds.), *Assessment of depression*. Berlin: Springer-Verlag.
- Taylor, J. 1953 A personality scale of manifest anxiety. *Journal of Abnormal Psychology*, **48**, 285-290.
- Vinokur, A., & Selzer, M. 1975 Desirable versus undesirable events: Their relationships to stress and mental distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 329-337.
- 渡辺 直登 1989 項目反応理論を用いた組織行動の測定 経営行動科学, **4**, 65-74.
- 渡辺 直登 1992a 項目反応理論の組織行動測定への応用とその課題 経営行動科学, **7**, 1-12.
- 渡辺 直登 1992b 項目反応理論による JDI 翻訳の等価性の検討 産業・組織心理学会第8回大会発表論文集
- Wyler, A. R., Masuda, M., & Holmes, T. H. 1968 Seriousness of illness rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 363-375.
- Zuckerman, M., & Lubin, B. 1965 *Manual for the Multiple Affect Adjective Checklist*. San Diego: Educational and Industrial Testing Service.
- Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.